彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集

藤丸遺跡 Ⅲ

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成25年3月

彦根市教育委員会

例　　言

1．本書は、彦根市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴い、平成23年10月21日から平成23年12月９日にかけて実施した、藤丸遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成24年11月９日から平成25年３月22日にかけて行った。

2．本調査の調査地は、彦根市高宮町字六ノ町904番１、905番１、906番１に位置する。

3．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：前川　恒廣
文化財部長：谷口　徹　　文化財部次長（兼文化財課長）：寺田　修
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦
史跡整備係長：北川恭子　　副主査：深谷　覚
副主査：辻　嘉光　　副主査：池田華人
主　任：森下雅子　　主　任：林　昭男
主　任：三尾次郎　　主　任：戸塚洋輔
主　任：田中良輔　　主　任：下高大輔
臨時職員：仙　昌幸

4．現地調査・整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。
現地調査：内堀善行　友田　勇　中田鉄雄　西村朝男　野瀬善一　浜野　勲
森　和代　山田勝義（作業員）　久保亮二（調査補助員）
整理調査：大西　遼　北森　光（滋賀県立大学学生）

5．本書で使用した遺構実測図は、久保亮二、戸塚が作成し、遺物実測図及び拓本については、仙　昌幸、大西　遼、北森　光、戸塚が作成した。
遺構と遺物の写真撮影は、調査担当者が行った。

6．本書の執筆及び編集は、戸塚洋輔が行った。

7．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

9．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器 □　須恵器 ■

目　次

例言

第１章　序論
1　調査の経緯と経過 ―――― 1
2　地理的・歴史的環境 ―――― 1

第２章　調査成果
1　基本層位 ―――― 6
2　遺構と遺物 ―――― 6

第３章　総　括 ―――― 14

出土遺物観察表
図版
報告書抄録

第1章　序　論

1　調査の経緯と経過

藤丸遺跡は彦根市高宮町・大堀町に位置し、本発掘調査としては今回の調査が3次調査となる。3次調査区は、高宮町字六ノ町904番1、905番1、906番1に位置する。藤丸遺跡は、芹川と犬上川によって形成された複合扇状地の扇央部に位置し、扇状地末端部の湧水地点より標高が高く、標高105～108mとなっている。約300m西方には、東山道が縦貫している。一帯は近年になって開発が進んできた地域であり、周辺には水田や畑がまだ多く残っている。3次調査地点も水田として土地利用が行われていた。

今回の緊急発掘調査は、民間の宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出及び調査依頼にもとづくものである。平成23年7月5～6日、開発面積2,932.21㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ10箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、トレンチ7箇所で遺構を確認するにおよび、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。したがって、協議を経て、工事のために遺構の現状保存が不可能な道路敷の範囲を対象として本発掘調査を実施した。

発掘調査は平成23年10月21日に着手し、平成23年12月9日に終了した。調査面積は432㎡である。表土を重機（バックホー）により除去した後、人力により遺構の検出・掘削を行った。遺構平面図の作成は、グリッドを基準に縮尺20分の1を基本に、適宜縮尺10分の1で人力によって行った。その後、平成24年11月9日～平成25年3月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

2　地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

藤丸遺跡は、彦根市高宮町・大堀町に所在する古墳時代から古代の遺跡である。鈴鹿山系から流れる芹川・犬上川に挟まれた標高105～108mの微高地上に立地する。藤丸遺跡の北方には、鞍掛山と亀甲山が芹川の両岸に位置し、芹川右岸の平地をはさんで霊仙山系の末端の丘陵が東方から正法寺町付近にのびている。藤丸遺跡の東方、南方は、平地が広がり徐々に標高を高めつつ多賀大社、敏満寺付近の青竜山の丘陵へ至る。犬上川の左岸と右岸には、多賀町楠崎付近を扇頂とする犬上川扇状地が広がる。西方には、芹川下流の雨壺山丘陵があ

表1　藤丸遺跡における発掘調査

調査番号	調査時期	調査主体	主な時代	文献
1次	1993年10月～1993年12月	彦根市教育委員会	古墳前期・奈良	1
2次	2004年12月	彦根市教育委員会	奈良	1
3次	2011年10月～2011年12月	彦根市教育委員会	奈良	本書

文　献

1　彦根市教育委員会　2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集

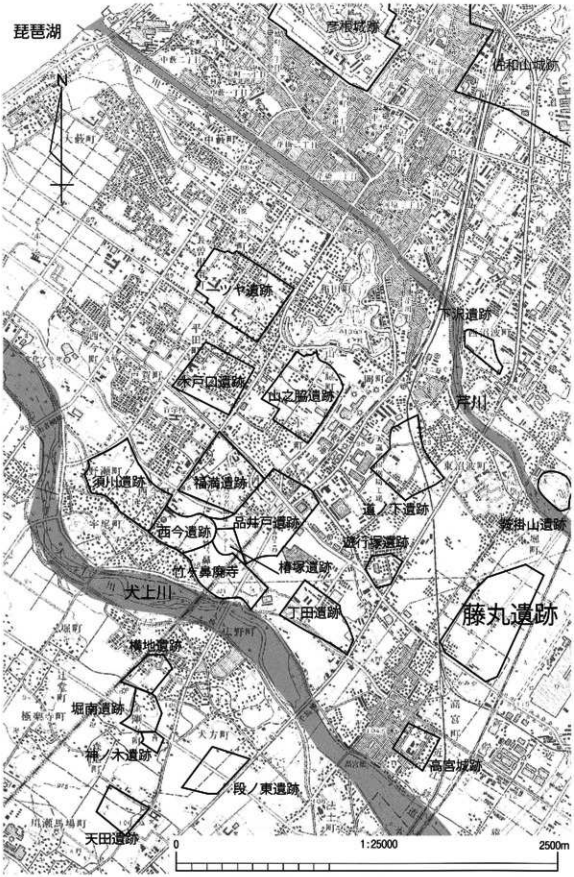


図1　藤丸遺跡とその周辺の遺跡

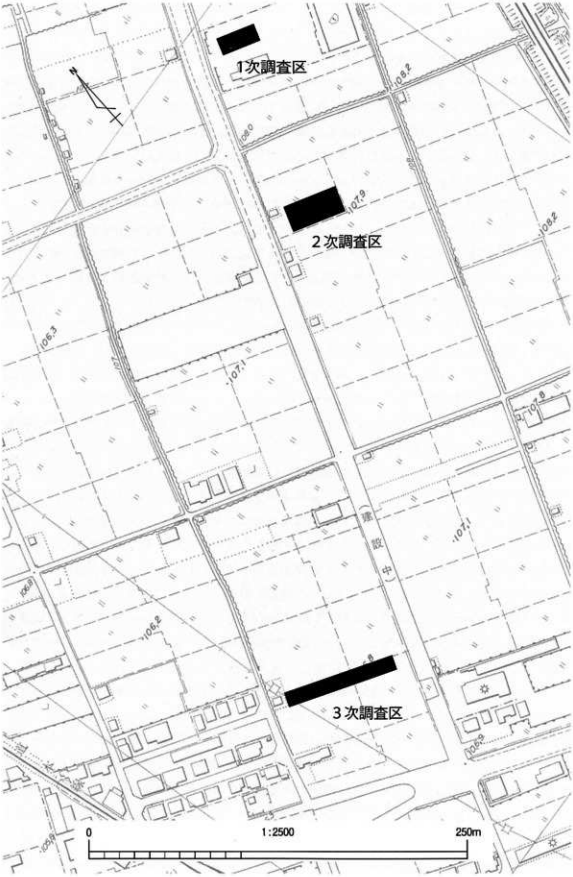


図２　調査区の位置

り、琵琶湖岸まで沖積平野が広がっている。このように藤丸遺跡は、犬上川・芹川の複合扇状地上に位置し、犬上川扇状地の扇端にある湧水地よりも標高の高い土地に位置する。

（2）歴史的環境

縄文時代　芹川の扇状地では、縄文時代晩期から遺跡が確認され、大岡遺跡では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土し、久徳遺跡では縄文時代晩期の土器棺墓が検出されている。土田遺跡では、土器棺墓からなる後期・晩期の墓域が検出されている。また、犬上川流域で最も古い遺物は、福満遺跡から出土した縄文時代前期末の大歳山式土器である。福満遺跡は、犬上川流域のなかでも琵琶湖に近い水の豊富な沖積地の微高地上に位置し、縄文時代中期の様相は不明瞭であるが、後期から晩期にかけて集落が展開する。福満遺跡の東に位置する丁田遺跡では、竪穴建物と埋設土器が検出され、中期末の集落の存在が明らかとなった。墓の可能性がある埋設土器の中からは、翡翠大珠が出土している。縄文時代の稀少な装身具である翡翠大珠は、北陸地方から流通したものと考えられ、湖東地域と北陸地方との関係や湖東地域の縄文社会を考えるうえで重要な遺物である。

弥生時代　弥生時代前期・中期の遺跡の様相をみると、犬上川右岸の竹ヶ鼻廃寺遺跡において弥生時代前期の土器が出土し、芹川流域の下沢遺跡では弥生時代前期の土器棺墓が検出されている。一方、犬上川左岸の荒神山麓では、稲里遺跡で弥生時代前期の集落が、妙楽寺遺跡では弥生時代前期末から中期前半の集落が調査されている。川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が調査されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。

弥生・古墳移行期　犬上川右岸の福満遺跡、品井戸遺跡と左岸の猫南遺跡が知られ、その多くは、扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と方形周溝墓域が検出され、品井戸遺跡と猫南遺跡においても、同様に方形周溝墓域が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、S字状口縁台付甕を含む庄内式併行期の土器が出土し、北陸地方や濃尾平野とも強い関係をもっていたことが想定される。芹川流域では、沖積地に位置する下沢遺跡で方形周溝墓が検出されている。芹川の扇状地の扇央部に位置する木曽遺跡では、庄内式併行期から布留式期の集落が営まれ、布留式期の竪穴建物からは、珠文鏡の破鏡が出土している。

古墳時代　古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長124mの前方後円墳で、大津市膳所茶臼山古墳とほぼ同形・同大である。膳所茶臼山古墳とともに、琵琶湖における水運を担った有力な被葬者が埋葬されたのであろう。古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が築かれる。現在、30基以上の古墳が確認されている。荒神山王谷1号墳の横穴式石室の玄室は、やや寸詰まりのプランで、持ち送り技法によって構築され、天井石は一石である。ドーム状を呈し、渡来系氏族との関わりが強い。福満遺跡では、円圏文をもつ子持勾玉が出土しており、こうした子持勾玉は日本海側や韓半島においても出土していることから、韓半島と日本列島との交流を示す遺物として注目できる。これらの横穴式石室や子持勾玉からは、犬上川流域において渡来系氏族が定着した様子がうかがわれる。福満遺跡の付近には、「椿塚」

という數があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わり、古墳が存在した可能性が高い。芦川流域の本曽遺跡においても、渡来系氏族との関連が推定される古墳時代後期の大壁造建物が検出されている。また、芦川流域では鞍掛山遺跡、正法寺古墳群において中期・後期古墳が構築されている一方、琵琶湖岸の松原内湖遺跡では、須恵器と耳環を副葬した古墳時代後期の土壙墓が確認され、その東に南北に伸びる佐和山丘陵においても後期古墳である磯山の諸古墳、塚塚古墳、千代神社裏山古墳が確認されている。

奈良・平安時代　犬上川流域の白鳳寺院としては、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺が知られる。藤丸遺跡の西方に位置する高宮廃寺では、高宮町小字「遊行塚」に塚状の高まりがあり、それが鎌倉時代の遊行上人が建治３年（1277）に巡錫回向した遊行塚であったと伝わる。礎石もみつかっているが、塚状の高まりとともに現存しない。白鳳時代の瓦も出土し、古代寺院であったと考えられている。また、藤丸遺跡の北東に位置する鳥籠山遺跡では、瓦と須恵器をともに焼成した窯跡が検出されている。藤丸遺跡周辺では犬上郡の下部単位である高宮郷が、大堀町付近には駅家郷が存在していたことが推定されている。壬申の乱（672年）の古戦場である鳥籠山は、藤丸遺跡の北方の鞍掛山に比定され、その周辺は東山道鳥籠駅に比定されている。東山道は鞍掛山と亀甲山との間を通り、東山道はこの付近から、鳥籠駅の前駅である清水駅の比定地である東近江市清水鼻付近へのびており、その間の甲良町尼子西遺跡では実際に道路遺構が検出されている。藤丸遺跡の西方では、東山道は竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東に位置し、竹ヶ鼻廃寺遺跡では白鳳時代から奈良時代の瓦が出土し、白鳳時代以降の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、丁田遺跡、藤丸遺跡、法土南遺跡では、掘立柱建物と竪穴建物からなる集落が営まれるが、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設置されており、円面硯や銅匙も出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では石帯が出土し、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたものと考えられる。

鎌倉・室町・戦国時代

東海道から多賀大社へのびる「多賀道」が分岐する高宮の集落では、集落中心部の東寄りにある高宮小学校・高宮幼稚園に高宮城跡が存在した。高宮城跡は、鎌倉時代から戦国時代に当地を支配した高宮氏の居城で、発掘調査によって堀状の遺構が検出されている。高宮の北方の大堀にも大堀城跡の存在が推定されているが、詳細な点は不明である。

藤丸遺跡における過去の調査をふりかえると、１次調査では奈良時代と推定される竪穴建物３棟や古墳時代前期の土器、奈良時代の土師器、須恵器が検出され、２次調査では、奈良時代と推定される掘立柱建物５棟、柵１条が検出されている。このように、藤丸遺跡は奈良時代を主体とする集落遺跡である。また、従来の試掘調査と本調査により、藤丸遺跡における旧地形も少しずつ明らかになり、低地と微高地が複雑に織り成す変化に富んだ地形であったことが知られる。微高地の基盤は安定し、微高地と微高地の間の低地には網状の流れが刻まれ、砂礫が堆積している。古代の集落は、こうした微高地上に存在する可能性が高い。

第2章　調査成果

1　基本層位

藤丸遺跡における基本層位としては、1～4層に分類できる。1層は、灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。2層は、これに伴う黄褐色粘質土の床土である。3層は暗褐色粘質土で、奈良・平安時代の遺物を含む包含層である。約15～25cmの厚さで堆積している。4層は黄褐色粘質土の基盤層である。基盤面の標高は、105.2m～105.3mである。調査区の西端が高位面にあたり、中央部と東端の基盤層には礫が多く含まれ、遺構は希薄である。

遺構検出は、基盤層である4層上面において行った。遺構の埋土は暗褐色粘質土で、3層の包含層との判別はきわめて難しい。今回の調査では、奈良時代の竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟、土坑を検出した。

2　遺構と遺物

（1）竪穴建物

SH01

SH01は調査区西側で検出された竪穴建物である。北側部分は調査区外にのびており、平面はほぼ正方形であると推定される。東西3.68mで、南北の長さは推定3.7mである。南西部の隅には張り出し部がある。柱穴は四隅に配されるようである。南東部の床面では約6cmの厚さで焼土が残存する。深さは最深部で30cmを測り、比較的残存状況は良好である。土層観察によると、埋土は3層に分けられる。最下層の1層が内側に傾斜をもって堆積しており、遺構の外側から土砂が流入した状況がうかがわれる。その後、2層、3層と堆積しているが、特に2層には地山のブロックが多く含まれている。遺物は1層にはほとんど含まれず、2層と3層に多く含まれている。1層と2・3層の堆積には時期差があるものと推測され、2層と3層については、攪拌がみられ、人為的に堆積した可能性を指摘できる。

1～29はSH01の埋土から出土した遺物である。1～4は1層と2層から出土し、出土層位を区別できていない。1は土師器甕、2は須恵器蓋、3と4は須恵器坏である。5～10は3層から出土した。5、6は須恵器蓋である。7～10は須恵器坏で、10は高台をもつ。11～24は、SH01の埋土から出土した。11～13は土師器坏で、12と13の口縁部内面に横ミガキが施され、若干くぼむ。14～17は、須恵器蓋である。18～22は、須恵器坏である。20には高台がなく、21、22は高台をもつ。23、24は須恵器長頸壺で、23には外面に窯体が付着する。

25～29は、SH01の埋土から出土した7世紀後半と推定される瓦片である。25、26は3層から出土した。25、27、28、29は丸瓦、26は平瓦の可能性があるが、はっきりしない。28の外面にはタタキ調整が施される。26、28、29の内面には布目痕が残る。

30、31、33、37、39は、SH01の床面から、32、35、36、38はSH01内SP07の上面において床面とほぼ同じ高さで出土した。34は床面から15cmほど上の位置で出土した。30は土師

器甕の把手である。31は7世紀前半の須恵器蓋である。32、33、34は須恵器坏である。35、36は7世紀代の土師器甕である。37は土師器坏で、内外面にはナデの後に横ミガキが施される。38は須恵器坏である。39は円盤状鉄製品で径4.3cm、厚さ5mmを測る。鉄製紡錘車の紡輪の可能性もあるが、孔の有無が明瞭であり、判然としない。

各層から出土した土器は、7世紀後半から8世紀前半を中心とするものが大半である。また、床面出土土器は、31、35、36が7世紀前半と古いが、その他は7世紀後半から8世紀前半のものである。堆積状況と遺物の時期を考慮すると、遺構の時期はほぼ7世紀後半から8世紀前半であろう。ただし、床面で7世紀代の遺物も出土していることから、8世紀前半代に堆積が進んだものと考えられるが、実際に機能していたのは7世紀代にさかのぼる可能性が十分に考えられる。

（2）掘立柱建物

SB01

SB01は、SH01の南西に位置し、3間×1間と推定される掘立柱建物である。SP02からは土師器小片が出土した。SP03からは45の須恵器坏が出土し、7世紀後半から8世紀前半のものであろう。

SB02

SB02は、3間×2間の掘立柱建物である。柱穴から遺物は出土していないが、SB01とほぼ同時期のものと推定される。

（3）土坑

SK01

SK01は、長さ1.37m、幅1.15mの不定形な土坑である。北側では溝状の遺構ときりあっている。

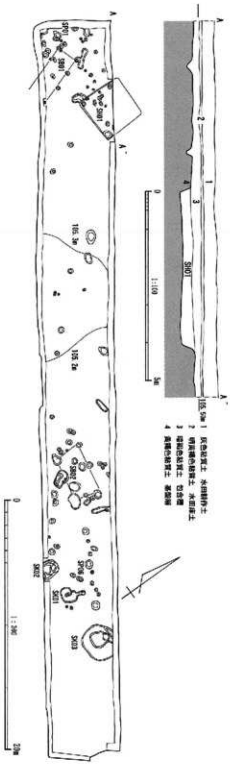


図3　調査区全体図・土層断面図

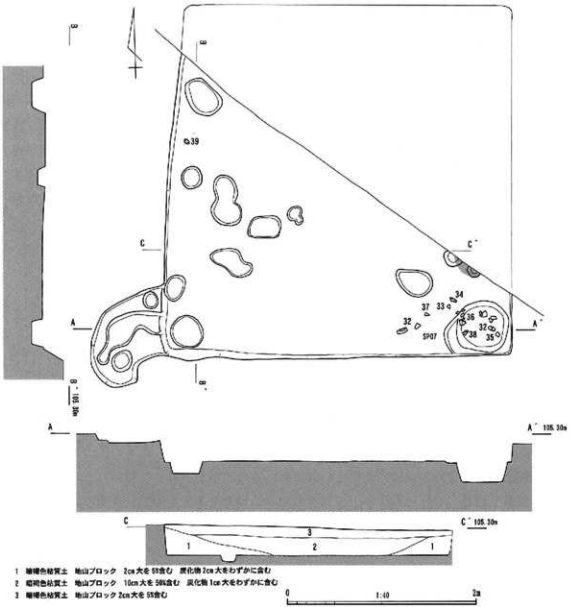


図4　SH01竪穴建物

SK02

SK02は、幅1.65mの平面円形の土坑である。下層では、土中の鉄分が沈殿し、硬化していた。40の須恵器坏口縁部片が出土し、8世紀前半の遺構であると推定される。

SK03

SK03は、東西2.86m、南北2.55mの土坑である。柱穴の可能性もあるが、周辺に同様な遺構はなく、性格は不明である。41の土師器坏、42の土師器甕、43の須恵器坏、44の須恵器長頸壺が出土した。これらの遺物の時期は7世紀後半から8世紀前半で、遺構の時期を示すものであろう。

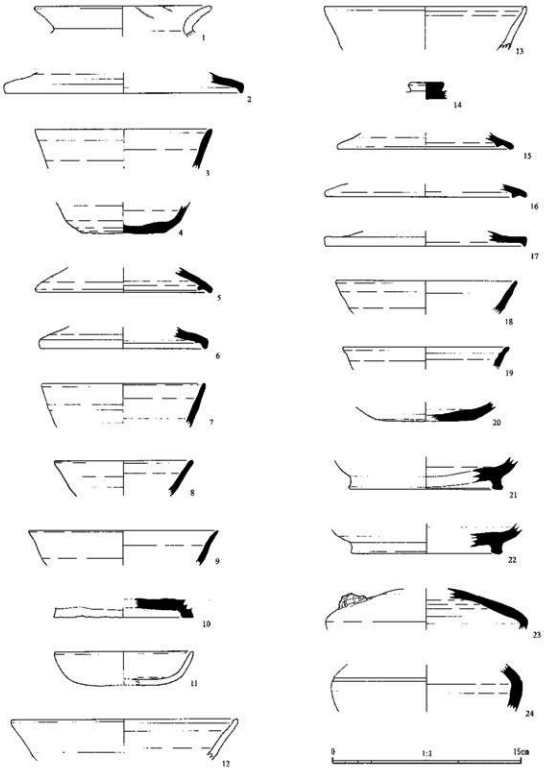


図5　SI101出土遺物（1）

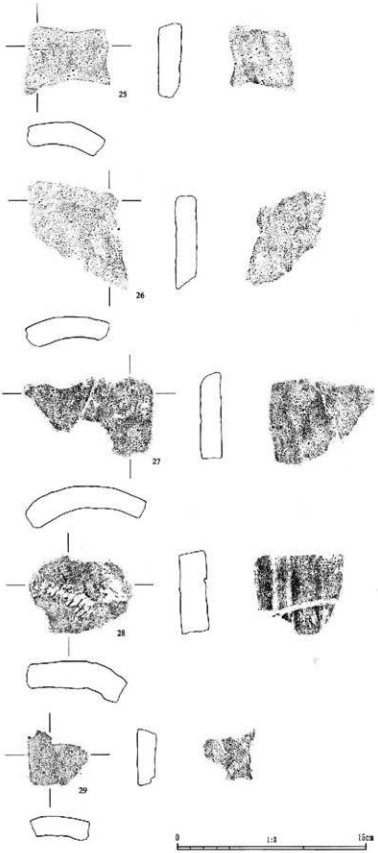


図6　SH01出土遺物（2）

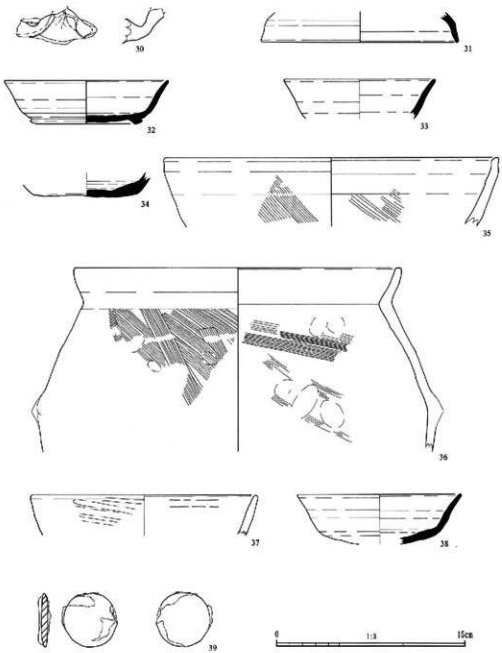


図７　SH01出土遺物（３）

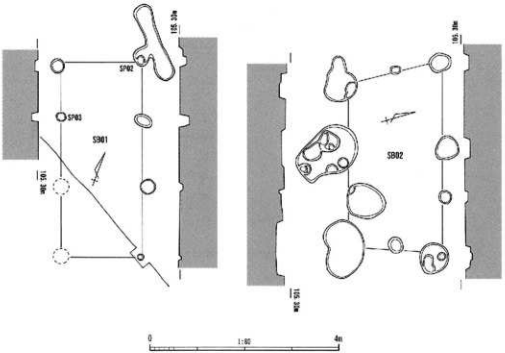


図８　SB01・02掘立柱建物

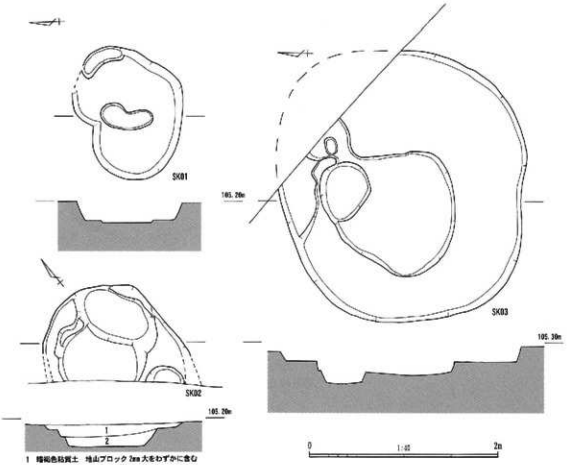


図９　SK01・02・03土坑

（4）包含層出土遺物

包含層である3層からは、46～57の遺物が出土した。46は、6世紀末から7世紀の土師器甕口縁部片である。47～51は、SH01付近の包含層から出土した。47は土師器甕口縁部片である。48～51は須恵器蓋である。48はかえりをもたず、6世紀代のものである。49、50、51は7世紀後半から8世紀前半のものである。52、53、54、55は須恵器坏である。56は須恵器甕である。57は刀子の中子部分であろう。包含層を掘削した際の排土から検出された。

3層出土土器は、大半が7世紀後半から8世紀前半のもので、わずかに6世紀末から7世紀の土器を含む。8世紀前半以降の土器は出土しておらず、8世紀代までの間に堆積が進み、包含層が形成された可能性が高いものと考えられる。

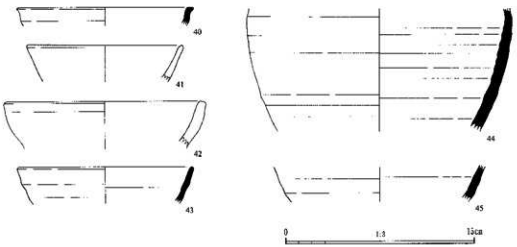


図10　土坑・柱穴出土遺物

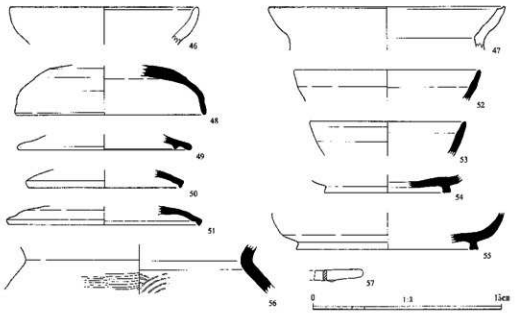


図11　包含層出土遺物

第3章　総　括

今回の調査により、7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟が検出された。SB01はほぼ正南北を主軸とし、SB02は東西に軸をとるものである。竪穴建物と掘立柱建物は、ほぼ同時期の遺構であると推定されるが、詳細な時期的関係は不明瞭である。藤丸遺跡の北端に位置する1次調査区では、奈良時代と推定される竪穴建物3軒が検出されていたが、南端部に位置する今回の3次調査区で竪穴建物が検出されたことにより、藤丸遺跡では居住域が微高地上に点在している状況が推測できる。1次調査区の南側に位置する2次調査区においても掘立柱建物5棟、柵が検出されているが、この地点では遺物はわずかに出土している程度である。竪穴建物と掘立柱建物では機能や性格が異なる可能性があり、時期的な関係や遺跡内の位置関係などは今後の課題である。

わずかではあるが、奈良時代の瓦が竪穴建物から出土した点も留意される。SH01竪穴建物の埋土から出土しており、遺構の埋没過程で混入したものと考えられる。藤丸遺跡の西方約500mの位置には、高宮廃寺の推定地である遊行塚遺跡があることから、高宮廃寺との関係が推測される。

また、藤丸遺跡周辺には郡の下部単位である高宮郷が存在したとされるが、藤丸遺跡の古代集落の位置づけについても問題が残されている。東山道沿いに位置する藤丸遺跡の西方では高宮廃寺や丁山遺跡が、東方では八反切遺跡、土田遺跡、木曽遺跡が、北方には瓦と須恵器を焼成した窯跡の検出された鳥籠山遺跡が分布しており、周辺遺跡の様相や高宮廃寺を建立した有力氏族の動向もふまえ、藤丸遺跡における古代集落の性格について考える必要があろう。

参考文献

北村　圭弘　1992「近江の古代寺院研究の基礎資料Ⅱ」『滋賀文化財だより』No.172　財団法人滋賀県文化財保護協会

葛野泰樹・吉田秀則　1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　1997『木曽遺跡Ⅱ』

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　2002『木曽遺跡・土田遺跡・月ノ木遺跡』

新高宮町史編纂委員会　2007『新高宮町史』　高宮学区連合自治会・高宮町公民館

多賀町教育委員会　1999『木曽遺跡（第2次～第7次調査）』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

高橋美久二　2007「律令国家と近江」『新修彦根市史　第1巻通史編古代・中世』　彦根市

谷口　徹　1992「彦根の古代寺院（1）」『彦根城博物館研究紀要』第3号

彦根市教育委員会　1992『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第23集

彦根市教育委員会　2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集

彦根市教育委員会　2006『八反切遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第38集
彦根市教育委員会　2009『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集
彦根市教育委員会　2009『八反切遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第42集
彦根市教育委員会　2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

表2　出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存(%)	反転・酸化	器径・幅(cm)	器高・長さ(cm)	口径・厚さ(cm)	色調	その他
1	SI101	土師器	甕	10	反			14	浅橙色	
2	SI101	須恵器	坏蓋	10	反	19			灰白色	
3	SH01	須恵器	坏身	10	反			14	明青灰色	
4	SH01	須恵器	坏身	20	反				灰色	底径6.6
5	SH01	須恵器	坏蓋	20	反	14			灰白色	
6	SI101	須恵器	坏蓋	10	反	13.2			灰白色	
7	SI101	須恵器	坏身	20	反			13	明青灰色	
8	SH01	須恵器	坏身	10	反			11	灰白色	
9	SH01	須恵器	坏身	15	反			15	明青灰色	
10	SH01	須恵器	坏身	20	反				灰色	底径11
11	SI101	土師器	坏	30	反			11	浅黄橙色	
12	SH01	土師器	坏	20	反			18	橙色	
13	SH01	土師器	坏	20	反			16	明褐色	
14	SH01	須恵器	坏蓋	5					明青灰色	
15	SI101	須恵器	坏蓋	10	反	14			灰オリーブ色	
16	SH01	須恵器	坏蓋	5	反	16			灰白色	
17	SH01	須恵器	坏蓋	10	反	17			灰オリーブ色	
18	SH01	須恵器	坏身	20	反			14.4	灰白色	
19	SI101	須恵器	坏身	10	反			13.2	灰白色	
20	SH01	須恵器	坏身	15	反				灰色	底径8
21	SH01	須恵器	長頸壺	15	反				灰白色	底径12
22	SH01	須恵器	坏身	10	反				灰白色	底径12
23	SI101	須恵器	長頸壺	15	反				灰オリーブ色	
24	SH01	須恵器	長頸壺	15	反				褐灰色	
25	SH01	瓦	丸瓦	5					灰白色	
26	SH01	瓦	平瓦	5					浅黄色	
27	SI101	瓦	丸瓦	5					灰白色	
28	SH01	瓦	丸瓦	5					灰白色	
29	SH01	瓦	丸瓦	5					橙色	
30	SH01	土師器	甕	5					浅黄色	
31	SI101	須恵器	坏蓋	15	反	16			灰白色	
32	SH01	須恵器	坏身	30	反		3.4	13	明青灰色	底径7.9
33	SH01	須恵器	坏身	15				12	灰白色	
34	SH01	須恵器	坏身	20					灰白色	底径8.3
35	SI101	土師器	甕	10	反			26.6	浅黄橙色	
36	SH01	土師器	甕	25	反			26	浅黄橙色	
37	SH01	土師器	坏	15	反				明赤褐色	
38	SI101	須恵器	坏身	25	反			13	灰白色	
39	SH01	鉄製品		95		4.3	4.3	0.5		
40	SK02	須恵器	坏身	10	反			14	灰色	
41	SK03	土師器	坏	10	反			12.4	灰黄色	
42	SK03	土師器	甕	10	反			16	浅黄橙色	
43	SK03	須恵器	坏身	15	反			14	黄灰色	
44	SK03	須恵器	長頸壺	20	反	21			灰色	
45	SB01(SP03)	須恵器	坏身	10	反				灰白色	
46	3層	土師器	甕	10	反			15	浅黄橙色	
47	3層	土師器	甕	15	反			18.8	橙色	
48	3層	須恵器	坏蓋	15	反	16.2			灰白色	
49	3層	須恵器	坏蓋	10	反	13.8			灰白色	
50	3層	須恵器	坏蓋	10	反	12			灰白色	
51	3層	須恵器	坏蓋	15	反	15			灰白色	
52	3層	須恵器	坏身	10	反			14.8	灰白色	
53	3層	須恵器	坏身	10	反			12.4	灰白色	
54	3層	須恵器	坏身	15	反				灰白色	底径10
55	3層	須恵器	坏身	10	反				灰白色	底径14.4
56	3層	須恵器	甕	5	反				灰白色	
57	3層	鉄製品	刀子	40				0.3		

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

1　調査区全景　西から

2　調査区全景　東から

図版 2

1　SH01竪穴建物　南から

2　SH01竪穴建物土層　南西から

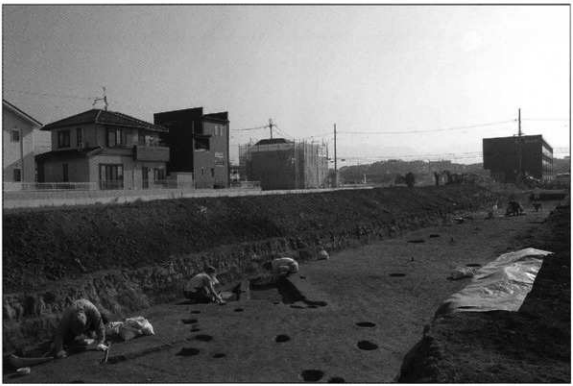
3　SH01遺物出土状態　西から

1　SK02土坑　西から

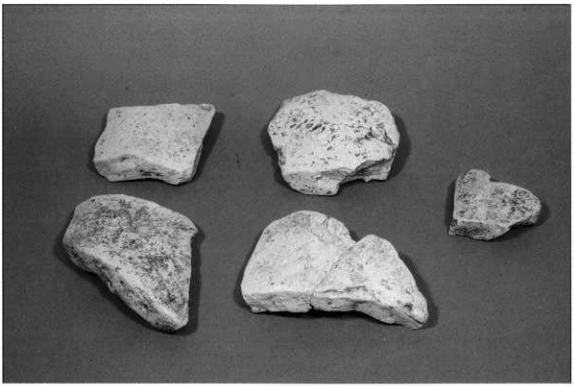
2　SK03土坑　南西から

図版 4

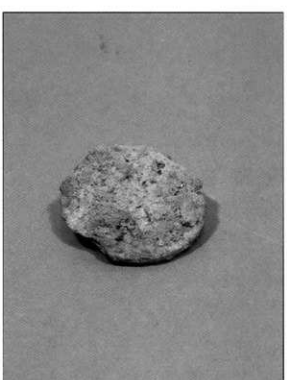
1　SB01掘立柱建物　北から



2　調査風景　西から



1　SH01出土瓦



2　SH01出土鉄製品

3　出土刀子

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふじまるいせき3
書名	藤丸遺跡Ⅲ
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	53
編著者名	戸塚洋輔
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833
発行年月日	20130328

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
藤丸遺跡	彦根市 高宮町	25202	62	35度 14分 18秒	136度 15分 44秒	432㎡	20111021 ～ 20111209	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤丸遺跡	集落	奈良時代	竪穴建物 掘立柱建物 土坑	土師器 須恵器 瓦 鉄製品	

彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集

藤丸遺跡Ⅲ

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成25年（2013年）3月28日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜県岐阜市七軒町15番地
TEL 058-263-4101

FUJIMARU SITE

March, 2013

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division